

アメリカ政治と文化  
—『アメリカ素描』とクリントン大統領—

American Politics and Culture  
- Sketches of America and President Clinton -

森 豪

Tsuyoshi MORI

**Abstract:** The aim of this paper is to point out that the Monica Lewinsky scandal has the fundamental features of America which are pointed out in R. Shiba's *Sketches of America*. Why do Americans deal with such a scandal so seriously? Because it has a deep relation to the fundametalms which made America. The first fundamental is law. America is the country which is called "the states" because it is artificially made by law. The second thing is money which is the immigrants' motivation to come to America, and makes it possible for them to realize their American dreams. The scandal has another element in addition to those. It is the cultural and social trend in the 60's which opened the door to the changes after the 60's. Independent Counsel Kenneth Starr is said to dislike the moral change after the 60's and have brought on "the cultural war."

1. はじめに

1999年2月12日、クリントン米大統領は、自身の不倫もみ消し疑惑に基づく弾劾裁判で、訴追条項の「偽証」と「司法妨害」について無罪の評決を得た。1998年1月7日にホワイトハウスの元実習生モニカ・ルインスキーがポーラ・ジョーンズのセクハラ訴訟で大統領との性的関係を否定する宣誓供述書を提出し、1月16日に連邦高裁がスター特別検察官に不倫疑惑で捜査開始を許可して以来の不倫疑惑騒動に幕が下りた。一年以上もの間、国全体が巻き込まれるばかりでなく、世界が否応なくアメリカの影響下にあることを認識させられた。

Newsweek誌(99,2,3)の世論調査では、71%がルインスキー・スキャンダルでクリントンは人々の記憶に残ると回答し、不名誉な大統領として歴史に刻まれることを予想した。その一方クリントンの大統領としての支持率は66%と高率を記録している。国民がクリントンの大統領としての仕事と私事を区別した結果であると言えるだろう。それは、この事件を知る大多数の見方である。政治家の仕事と私事を区別するのは、成熟したのだという考え方があある。いずれも否定できないものであるが、このクリントン大統領への批判と支持は、アメリカの本質に関わるどころから生まれているように思われる。本稿では、この事件に垣間見えるアメリカの本質を、司馬遼太郎がアメリカ的なるものを論じてい

る『アメリカ素描』と対照させることによって考察したい。

## 2. 文化と文明

『アメリカ素描』は、アメリカ文化・文明論である。それは、「その一角に怠けながら存在して、アメリカというものの原型らしい像が感じとれれば」(p.28)<sup>1)</sup> と思って、書かれたものである。発表されたのは昭和60年で、アメリカ取材旅行は59年6月になされた。時のアメリカの大統領はレーガンであった。「あとがき」によれば、アメリカにゆく話は4年前にあったらしい。中国を根底にして日本と日本人について書いていた司馬には、その旅行の誘いは「風変わり」に思えたが、アメリカに関する文献を読み重ねていった。アメリカにゆく前に「アメリカ像」ができあがっていたようである。司馬の対象に向かういつものやり方がとられたわけである。司馬の「アメリカ像」の根幹にあるものも、いつものやり方と言っていいもので、中国文明とその周辺の国家を相対的視点でとらえて考えてきた経験から蓄えられた文化・文明論である。

アメリカにゆく気が生じたのも文化・文明論への興味からであった。

普遍性があるってイカすものを生みだすのが文明であるとすれば、いまの地球上にはアメリカ以外にそういうモノやコト、もしくは思想を生みつづける地域はなさそうである。そう考えはじめて、かすかながら出かける気がおこった。(p.11)

ここで「普遍性があるってイカすものを生みだす」ものとして文明の定義がなされ、「そういうモノやコト」を生み出す唯一の地域がアメリカであると言われている。これにルインスキー事件を重ね合わせると、今回の事件はとて「文明のコト」とは思えないが、事件の世界的影響を思うと、事件がアメリカの「文明のコト」と同じ扱いになってしまった滑稽さがある。そのようなことになってしまったのは、そこに「文明のコト」の要素が入っていたからである。

司馬は文化と文明を定義して次のように言う、

ここで、定義を設けておきたい。文明は「たれ

もが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」をさすのに対し、文化はむしろ不合理なものであり、特殊の集団(たとえば民族)においてのみ通用する特殊なもので、他に及ぼしがたい。つまりは普遍的でない。(p.11-2)

普遍的なものと言っても、生物学的なもの、遺伝や本能によるものは文明ではないし、文化でもない。セックスは生物学的なものであり、本能である。セックスに慣習や約束ごとが加わり、伝承されれば、そのセックスは文化となる。不倫というの、文化である。ある民族では一夫多妻が認められている。それを野蛮だと言い、文明国では一夫一妻だと言う場合に、そのセックス形式は文明となる。そこでは、不倫は野蛮であり、非文明的なものとなる。フランスでは政治家の職務上の仕事と私事は区別され、政治家のセックス・スキャンダルはまともに相手にされないという。セックスが私事に限定されるのは、文化に限定されていることである。司馬の言うように、文化は特殊なものであり、多様なものである。セックスもそこにあるはずであるが、ルインスキー事件では、それが公然のものとなり、裁判沙汰になってしまった。そこには、アメリカ特有の性格が働いていたからである。

司馬は、アメリカの特質がザ・ステイツにあると言う。

.....アメリカ人がよく自国のことを、  
「ザ・ステイツ (the States)」

とよんでいることに関心があった。合衆国という簡略語である、といってしまうはそれとしまいが、私の感覚には語感として、

「アタシの人工的な国家は」

といっているように、ついひびいてしまう。法でつくられた国というひびきである。言い換えれば、文明という人工でできあがった国ということばにちがいない。逆にいえば、韓国やアイルランドや日本のように文化の累積でできあがった国は、State ではない。(p.11)

法でつくられた文明の国であるがゆえに、ルインスキー事件は公然とした公共のものとなり、スターという過激に道徳的な検察官の存在があったにせよ弾劾裁判に発展せざるをえなかったのである。そう

ならざるをえない一面をアメリカの特質はもっていたのである。

司馬は「アメリカ文学の愛好者」であるが、スタインベックも彼の愛好する作家である。その特質を「現実という牛肉の大塊をむしりとりとてずしりと合にのせる」(p.20)と言う。そのような特質であるゆえに好きであると言うのは、司馬の志向するものもそういうものだというのである。飾りたえず、現実を、本質的な現実をそのままとらえようとする司馬がむしりとった「アメリカの原型」を念頭に置きながら、ルインスキー事件を考えてみたい。

### 3. 法が主人

クリントン大統領弾劾裁判の発端は、アーカンソー州知事をしていたクリントンに性的嫌がらせを受けたと訴えたポーラ・ジョーンズの民事訴訟に於けるモニカ・ルインスキーの証言にある。大統領の女性との関係を調査していた原告側弁護士は、大統領との関係が噂となっていた元ホワイトハウス実習生モニカ・ルインスキーに事情聴取を行い、彼女は大統領との関係を否定した。その証言に注目したのが、ケネス・スター独立検察官である。スターは、ホワイトウォーター事件、すなわちクリントン夫妻の知事時代に於ける土地開発、不正融資疑惑事件の捜査を担当していた。スターは、クリントンがルインスキーとの親しい関係を隠すために彼女に偽証を強要し、クリントン自身も尋問された時に偽証したと考え、捜査を開始した。その動きが、1998年1月21日にワシントンポスト紙で報道され、マスコミの一斉取材報道となった。

スターが「証言」に注目し、そこに「偽証」の臭いを嗅いだ時、この不倫疑惑はひとときわアメリカ的な特質を備えた事件となった。それが単なるセックス・スキャンダルであれば、それまでのセックス・スキャンダルのようにクリトンは退け、このような大問題にはならなかったであろう。それが、そうならなかったのは、それがアメリカの根幹に触れるものとなっていたからである。「ニューズウィーク」誌(98.9.23)に次の記事がある。

こうした細かい性的描写のためにかすんでしまったのが、クリントンが周到に事実を隠蔽しようとしたことを立証するというスター報告書の中心

である法的問題だ。

性的描写は、人の関心を引き付けたのと同じくアメリカの根幹に関わる問題を忘れさせる一面もっていた。アメリカの根幹に関わる問題とは、アメリカは法律で成り立っている国であるということである。

『アメリカ素描』に「法が主人」という標題の一章がある。近代国家としてのアメリカの始源となる、プリマス湾のメイフラワー号上での清教徒たちによる誓約書について述べたもので、「正義公平な、法律、命令等を発し、憲法を制定し、又、公職を組織すべく、我等はすべて之等に対し、当然の服従をすべきことを誓約する」という言葉がそこにある。これがアメリカの根幹となった。司馬は、ボストンで会食した弁護士との会話を記している。

・・・なぜ弁護士になろうと思ったのですか、ときくと、クラーク氏は、  
「アメリカは法が主人ですから」  
と、答えた。さらに、  
「アメリカの政府は、大統領という人間が主人ではなく、法が主人ですから」  
だからやりがいがある、といった。(p.184)

不倫自体にアメリカのピューリタンの特質から許せないものがあるばかりでなく、「偽証」に「クリントンが周到に事実を隠蔽しようとしたこと」に重要性がある。今回のルインスキー事件は、「大統領という人間が主人ではなく、法が主人である」ことを如実に物語っている。大統領は法により訴追され法的に是認された。大統領自身、弁護士の経歴をもち、夫人は有能な弁護士であったのであり、周囲に強力な弁護士団を擁している。「法が主人」を体現している集団である。

『アメリカ素描』は、アメリカが人工の国であり、自然にできあがったネイションの国家ではないと言う。人工の国にとっては、その国を作った根本原理を守り抜くことは死活問題である。フランス人にとって政治家の私生活が問題とならないのは、それがネイションだからである。アメリカは、原理によって作った国であるから、その原理が常に問われる。大統領は、その原理の体現者でなければならない。その原理が揺らぐ時、国の存在理由が問われ、国中

が揺らぐのである。国の原理については過敏であり、法的問題に過敏である。

#### 4. 「豊かさ」という原理

不倫疑惑にも関わらず、クリントンは人気があった。その原因としてアメリカ経済の好調さがある。これも、アメリカの根幹に関わる。「アメリカ市民ぜんたいを儲けさせる、豊かにさせる、それだけを保障するのが大統領であるはず」(p.71)というのがアメリカ国民の本音であると『描写』では指摘されている。さらに「豊かさ」こそがアメリカに人を引き付けた理由であると、次のように言う、

ドルは、この大陸の内部で海流のように環流している。それを、幾枚多く自分の手もとにひきよせるかということが、ほとんどのアメリカ大衆の日常思想の基礎的関心であった。そのためにこそかれらやその父祖がこのアメリカへきたのである。豊かになる以外、なんのためにこんな土地に必要があったろう。

多くの政治家たちは、その選挙基盤の人達のゆたかさを保障するとして選挙に勝ち、その一事以外に関心をもたない(いまもそうである)。

(p.62)

「正義公平な法」というのがアメリカ建国の原理であるのと同じく、経済的成功もまたこの国の原動力である。その成功欲求が排日運動にもなりうると次のように指摘されている。

このようなアメリカにおける排日の歴史は、アメリカの恥部だったろうか。私はそうは思わない。多分に無思慮な大衆と、利益団体の利益のみを代表する政治家をかかえたこの人口国家にとっていけばゲームのような行為だった。えたいの知れぬ差別とはちがひ、この差別は正体が知られている。くりかえして言うが、カネである。(p.63)

弾劾裁判最中の1月19日に行われた一般教書演説の中で、クリントンは日本の対米鉄鋼輸出に関する制裁に触れることを忘れなかった。その言説は、拍手と歓声で迎えられたのである。

好調な経済。それはクリントンの政治的努力によ

ってもたらされたものである。経済的成功がクリントンの支持の母体になっていると言うが、その支持は当初から常にあったわけではない。彼の思い切った経済再建策は国民の反感を買うものでもあった。

レーガン大統領のいわゆるレーガノミックスによる大型減税と軍事支出増大、そして削減されない社会支出による財政赤字はブッシュ政権でも継続し、92年に大統領になったクリントンは単年度300億ドルにもなる巨額な財政赤字をブッシュ政権から引き継いだ。クリントンは、財政を建て直すために大幅な増税と社会保障費削減を公共・民間の投資促進策と組み合わせた経済再生計画を打ち出した。五年間に5000億ドルの赤字を削減しようとする大胆な計画であった。しかし増税は国民の嫌うものであり、クリントンの支持率は下がり、94年中間選挙で民主党は敗北した。ところが、その経済再生計画が実って景気の拡大が見られ、税収増となり、議会の支出抑制策もあって、財政赤字は減少してゆき、ついに赤字ゼロを達成した。

景気対策による経済的成功が、クリントンに支持を集めているのは明らかであるが、それだけではないことは、弾劾裁判中の99年一般教書演説の高い支持率によっても理解できる。その演説の中心は、予想される財政黒字の六割を社会保障に充当するというものである。その保障の対象は、単に貧困層や少数派という社会的弱者ではない。中産階級である。高齢化社会を控え、年金財源の破綻はかれらの関心の対象であり、そこに財政黒字を向けるという。

クリントンは、民主党員である。民主党員であるが、「新しい民主党員(ニューデモクラット)」である。「新しい民主党員」の目指す政府は、積極的な役割を果たす「小さな政府」である。人びとに機会を与えるが、責任も同時に求める。クリントンが法案化した「ナショナル・サービス」計画は、その具体例である。「ナショナル・サービス」計画は、進学を望む若者に一定期間地域社会の公共的な仕事につけば、進学資金を与えるというものである。

以前の民主党は、「大きな政府」を志向し、税負担が大きく、少数派のみを援護し、浪費すると批判されていた。その批判を「新しい民主党員」は避けようとする。しかしその根底に、以前の民主党に通じるものがある。以前の民主党の歴史の中でも60年代の民主党の足跡は、歴史上ははっきりと刻印されている。クリントンがベビーブーマーであることも

あり、ここで60年代との関係を考えざるをえない。ルインスキー事件は、60年代と密接しているという考え方もある。

## 5. 60年代との文化戦争

ジョナサン・オルターは、「ニューズウィーク」誌(99.1.13)でルインスキー事件が「文化戦争」だと言う。

九八年は、熾烈なアメリカの「文化戦争」が最高潮に達した年だった。ニクソン元大統領の顧問弁護士だったレナード・ガーマントは、クリントンが多くの人間から毛嫌いされる理由をこう語った。

「六〇年代の代表だからだ」

まさにそのとおり。ウォールストリート・ジャーナル紙の社説が筆をすべらせたとおおり、ケネスター特別検察官はクリントン個人だけでなく、「彼を生み出した世代」を告発したのである。

共和党をとくにいらだたせた九八年の出来事は、文化戦争が終わったこと、それも性の解放を訴えた六〇年代の勝利という形で決着したことだ。クリントンの支持率が最高水準を維持した事実は、今年最大の驚きだった。かつてアメリカ人の精神風土に深く根づいていたピューリタンの倫理感、もはや文化の主流ではない。

クリントンは、「六〇年代の代表」であり、スターはクリントン世代を告発したと言う。その「60年代」の特質は、「性の解放」ととらえられている。それと対立するのが、「ピューリタンの倫理感」である。オルターはこの両者の戦争を「文化戦争」と呼ぶ。ルインスキー事件渦中の98年中間選挙で民主党が勝利し、この戦争は「60年代」の勝利で終わったとする。

60年代は、「性の解放」だけが特質ではない。『素描』にも60年代の変化に触れた部分がある。

六〇年代になると、アメリカは、変ってしまった。たれも予測できなかった政治的・社会的変動が連続し、アメリカを支えた自信までが腐食する。これほど劇的に天気が変わるといふ社会があるだろうか(この活性こそアメリカの巨大な可能性なの

だが)。(p.171)

50年代のアメリカは自信にあふれていた。第二次大戦でヨーロッパを救済したことが、自国の文明の圧倒的優位さを意識させたのである。それが劇的に変化するのが、60年代である。その体現者が、ケネディである。アメリカの自信を喪失させたベトナム戦争に介入し、自らは暗殺されてしまった。

その60年代と関連させて『素描』では、「二十世紀は難民の時代」という標題の一章を設け、ジェイクというユーゴスラビア生まれの三十代の男を登場させている。ジェイクは、「ボクは、六〇年代の小野田少尉なんです」と言う。

ジェイクの場合、十四歳でかれの母とともにアメリカにやってきたのは、六〇年代だったのである。

高感度のフィルムのように、かれの感受性に六〇年代のすべてが焼きつけられた。たとえば、ビートルズの歌詞を通じて、国境のない世界、宗教のあらしのない世界へのあこがれが、かれの生の主題歌のようになった。また六〇年代には無政府主義的な政治運動もあり、LSD(幻覚発動剤)をのむことで現実を逃避しようとするヒッピーの時代でもあった。

さらにいえば、モハメッド・アリが徴兵を拒否し、キング牧師が良心的兵役拒否をよびかけた時代でもあった。

「あのころのアメリカはすばらしかった」

とは、ジェイクはいわない。ただ、人間が人間でありたいと願うはげしい思想的行為が、戦場の砲火のようにこの社会で炸裂しつづけた時代の小野田少尉が私なんです、とこの黒島伝治の研究者はいうのである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

アメリカは十年ごとにかかわるといわれている。かつての文明は普遍性をうしなって文化に化る。ジェイクの場合は六〇年代のアメリカを自分の文化にとりこむことによってこの文明の中で生きているのである。(p.218-9)

「六〇年代の小野田少尉」というこのアメリカ人は、60年代とは異なった時代にいることを意識しているのであろう。「六〇年代になると、アメ

リカは、変ってしまった」のであるが、実際にはそれ以降の変化の方が激しく、『アメリカ合衆国の歴史』（野村達郎編著）は「かつて一九六〇年代は激しい変化でアメリカ史上独特の時期とみられたが、実際にはそれ以後の時期にこそ巨大な社会的変化が生じたのである」<sup>2)</sup>という。そこで説明されている変化の概要は以下のようなものである。

1970年代以降、アメリカの人口の変化の特色は、高齢化、都市化、女性と家族の変化、人種・民族的多様化である。1970年ごろより出生率が低下し、1980年代には増加率は年約1%にすぎなくなり、1930年代の不況期を除いてアメリカ史上最低となった。これは高齢化を意味する。人口の地理的分布も変化し、1980年には国民は北部よりも南部と西部で生活するようになっていく。そこには企業の安い労働力コストを求めた生産立地の移転が大きく作用している。女性の労働参加は増大し、家庭の外で働く女性の比率は1960年代の35%から92年の58%に上昇している。女性の労働への進出により、独身の女性が増加し、避妊用のピルによる性関係の変化から家庭の男女の役割が変化し、世帯の規模が縮小し、単身者世帯が増加した。家族の形態は核家族の他に単親家族、同棲世帯、離婚と再婚による混合家族が増大し、多様化した。

人種民族構成も変化した。1965年の新移民法により、国別割当て移民制限が廃止されて以来、かつて移民の大部分を占めていたヨーロッパ系に代わってアジア系とヒスパニック系移民が増加した。非合法移民も増加した。その結果、合衆国の人口構成に大きな変化が生じた。1990年には、総人口2億4870万人のうちヒスパニックを除く白人が75.6%、黒人12.1%、ヒスパニック8.5%、アジア系2.9%、先住民0.9%となった。ヒスパニックはいずれ黒人の人口を越えると予想されている。

黒人の経済状況は改善され、政治的にも重要な役割を果たすようになった。しかし依然として貧しい黒人層があり、さまざまな社会的病理に蝕まれている。エスニックな多様性から多文化主義が唱えられようになった。ヨーロッパ系移民集団と有色マイノリティの対立が複雑化している。

今日のアメリカでは黒人、女性、マイノリティに平等な権利を認めることについては、明確なコンセンサスが定着し、市民運動も活発である。1960

年代から引き続いて活発な運動を継続している第一のものは女性運動であり、女性の地位は基本的に変化した。また社会的弱者を守る措置も進み、環境保護運動も活発である。

このような変化を見ると、60年代以降の方が劇的に変化していると思えるけれども、それぞれの変化の起源は60年代にあるように思える。変化の中で顕著なものは、女性や黒人の地位の向上であり、移民の、特にアジア系の移民の増加である。60年代は、公民権法の成立に見られるように、少数派に目を向けた時代であった。それは、特殊なものに目を向け、その特殊なものを正当化し、普遍的な意味をもたせたのである。少数派を尊重するのは、いかなる人間をも人間として尊重したいからである。その底には、ジェイクの「人間が人間でありたいと願うはげしい思想行為」がある。クリントンに対する黒人や女性の支持はルインスキー事件の間も高かった。クリントンの政策に、少数派への配慮があるからである。その姿勢には、60年代の末裔の姿が見られる。「性の解放」のみを60年代の特質とするのは、誤りである。

## 6. ゲイ文化の時代

クリントンの少数派への目配りが顕著に見えたのは、彼が軍隊内のゲイを世論の大勢に逆らってまで認めようとしたことである。ゲイは、司馬遼太郎の関心も強く引き付けた。「ゲイの文化（ライフ・スタイル）を公認せよ、法のもとで平等な権利を与えよ、ということがなぜアメリカだけでおこっているかということを知りたい」（p.101）と思ったと司馬は言う。ゲイ運動は少数民族を作ることを動機としていると言い、さらに次のように言う、

たとえば中国系は濃厚な文化を共有している。だけでなく家族主義で寄り添っている。ゲイの場合、家族主義はどうでもよいが、文化という“他に通用しがたいもの”を仲間だけで共有することによって暮らしのなかで安らぎをえたい。広大な文明空間に疲れてきた、というアメリカ人の気持が、ゲイ・パワーのなかに投影してはいないか、と私はいった。文化の裏打ちのない文明は本来ありえないと私は思っているのである。

「他に通用しがたいもの」がゲイ文化であるが、その運動自体はいかにもアメリカ的な様相を呈することについて次のように言う、

アメリカにあっては、ゲイという存在についてさえ、ゲイたちは法的公認という普遍性をもたせようとする。「忍ぶ恋」から見れば、ミもフタもなく、アジもソッケもない。しかし文明とはそういう合理性をもったものなのである。(p.106)

60年代に光をあてられた少数派は、60年代以降にその普遍性をまし、法的に存在を明確にしていたと言えよう。アメリカは、そういう社会に変化していった。今はそういう時代なのである。共和党はそういう時代の動きに逆行していると「ニューズウィーク」誌(99.2.3)は言う、

どうみても、共和党は「戦争」に敗れる運命にある。なぜか。今回の弾劾裁判で、文化的に多様化するアメリカに共和党の孤立化がいつそう際立ったからだ。

一三人の下院代表委員は、典型的な共和党支持層の縮図。全員白人男性で、多くがプロテスタン

ト、過半数が南部出身だ。今日のアメリカというより、二〇〇年前の建国期を彷彿とさせる。

クリントンには、世論の動向を常に見るという姿勢がある。それが彼にゆくべき方向を示し、彼の支えとなったことも確かなことである。

## 7. おわりに

文化の多様性は、文化の特殊性ゆえに生じる事態である。それがアメリカでは、文明的様相を呈するのである。性という個人的で特殊な文化が、文明の様相を呈し、弾劾裁判となってしまった。「文化戦争」に勝って、いっそうの普遍性を得た。大統領もする不倫が公然と存在権利を得たとも言える。しかし司馬によれば、文化と文明は交互に姿を変える可能性がある。文明は文化にもどる。普遍は特殊なものになる。不倫が、特殊な、個人的レベルにもどった時、それはそれぞれの形をとる。クリントン夫人のヒラリーがニューヨーク州上院議員選挙に出馬する意向があるというのを、「事実上の離婚宣言」とする報道(Time誌 99.2.22)は、底に渦巻く不合理な情念を垣間見させる。

## 注

- 1) 司馬遼太郎：司馬遼太郎全集、53, 28, 文芸春秋、東京、1998。以降の( )内の数字は本書の頁数を示す。
- 2) 野田達朗：アメリカ合衆国の歴史、296, ミネルヴァ書房、京都、1998。

## 参考文献

- 1) 砂田一郎：変わるアメリカ政治、世界、3, 164-174, 東京、1994。
- 2) 砂田一郎：政治変容のなかのクリントン、世界、4, 27-30, 1998。

(受理 平成11年3月20日)